

構文文法に基づく日本語他動詞文の分析 ―壁塗り交替を事例に―

永田 由香

京都大学大学院

nagata@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1. 本研究の目的

近年、Fillmore(1968)、Goldberg(1995)などの研究によって代表される構文文法¹のアプローチから、さまざまな言語現象が研究されている。しかし、その研究は主に英語を分析対象とするものであり、論者の知る限りでは日本語を対象とした構文文法的な研究は多いとは言いがたい。本研究は、構文文法的な知見を用いて日本語の言語現象の分析を試みるものである。特に、日本語においてのいわゆる壁塗り交替現象に着目し、日本語の言語現象に対しても構文文法的な分析が有効であると示すことを本研究の目的の1つとして挙げる。注意しなければならないのは、ゴールドバーグを中心に議論されている項構造構文の研究を、そのまま日本語の現象へと援用することは難しいという点である。それは、日本語は英語に比べて、i)語順による統語的制約がゆるい²、ii)後置詞である格助詞によって意味役割がマークされる、などの点で異なっているからである。このように性質の異なった日本語に対し、英語の分析手法をそのまま用いることは分析にとって有効とは言いがたい。そのため、語の配列の中でも特に格助詞の組み合わせからなる格パターンが構文の形式面を担うと仮定し、日本語の言語現象に対して有効な分析手法を検討することを本研究の目的の2つ目として挙げる。これは、構文文法的なアプローチが根本的に日本語の分析には適さないということを示すのではない。逆に、構文文法的アプローチが依拠している言語観に立った分析が、英語だけではなく、幅広い言語現象に対しても同様に有効であるという可能性を示そうとするものである。

2. 本研究で着目する現象の特徴

本研究では、従来から語彙意味論的アプローチにおいて盛んに研究されている、いわゆる壁塗り交替と呼ばれる現象を取り上げる³。一般に、交替現象とは、同じ名詞句と同じ動詞が共起している表現において、真理の意味を違えずに、その格助詞の取り合わせが変わる現象であるとされる。ここで取り上げる現象は、使役移動構文「(Zが)XにYをVする」と使役状態変化構文「(Zが)XをYでVする」である⁴。以下、簡略にはあるが、本研究で扱う言語現象の特徴を形式的側面と意味的側面とに分けて確認していくこととする。

2.1 形式的側面

本節では、いわゆる壁塗り交替現象の形式的な側面に関して、簡略にのみだが確認する。

以下に挙げる事例は壁塗り交替現象の一例である。

- (1) a. (先生が)教壇を花で飾った。
b. (先生が)教壇に花を飾った。
- (2) a. (一郎が)穴を土で埋めた。
b. (一郎が)穴に土を埋めた。
- (3) a. (男が)通行人をナイフで刺した。
b. (男が)通行人にナイフを刺した。
- (4) a. (警官が)犯人を銃で撃った。
b. (警官が)犯人に銃を撃った。

(1)から(4)までの表現に見られる表面上の共通性を抽出すると、(5)のように規定することができる。

- (5) a. (Zが)XをYでVする
b. (Zが)XにYをVする

(5)のそれぞれの表現を比較してみると、i)共通の動詞 V をとること、そして、ii)共通の名詞句 X、Y、Z をとること、という共通点が確認できる。それとは逆に、iii)異なる格パターン「一を一で」「一に一を」が生起するという相違点も確認できる。そして重要なのは、こうした表面上の特徴が満たされた時に初めて、iv)これらの両表現は交替するとみなされる、ということである。従来の研究では、i)の点に主眼を置き、動詞自体が持つ性質によってiv)という現象が起こるか起こらないかが決定されるという見方であった。そのため、動詞内部の意味構造の記述、また、動詞の分類が進められてきた(cf. 影山 1996、由本 2000、岸本 2001)。

本研究では、このような従来の動詞偏重のアプローチに疑問を呈し、言語現象に対するより経験的で妥当な説明を与えることを試みる。具体的には、(5)で規定されたような表現が、iii)で挙げたように異なる格助詞の組み合わせと共起する点に注目する。4節で触れることになるが、本研究は認知言語学の言語観に基づいている。意味と形式との一対一対応を支持する認知言語学の立場からすれば、どれだけ真理条件的な意味が同じとみなされようとも、(5a)と(5b)の表現は何らかの意味的な動機づけに基づいて異なった形式をとっているのだと考えられる。この動機づけの記述に関しては、5節で実際の事例の検討と共に詳細を示すことにする。

2.3 意味的側面

この節では意味的側面を確認するが、注意したいのは、本稿では形式と意味とは別個のものとして存在しているのではないとみなす点である。意味と形式とのシンボリックな結

びつきからなるユニットとして言語表現を捉える認知言語学の立場に立っている本研究からすれば、意味と形式の二者は別ち難く結びついているものである。ここで形式と意味に分けて論じる理由は、記述の煩雑さを避けるということのみであり、それ以上のものではない。

従来、(1)から(4)のような表現は真理条件的に同じ意味を表わし、パラフレーズの関係にあると考えられてきた。しかし、認知言語学の視点に立てば、状況レベルの意味(真理条件的意味)と認知レベルの意味とを区別して考えるため、これらの構文交替という現象は厳密なパラフレーズではないと捉えられる(cf. 山梨(1995:6))。(5a)のパターンで事態を表現する場合と(5b)のパターンで事態を表現する場合とでは、認知主体がどの部分に焦点を当てて一連の事態を言語化しようとしているかが異なる。以下の(6)(7)の事例を検討してみよう。

- (6) a. *男をナイフで刺したが、刺さらなかった。
- b. 男にナイフを刺したが、刺さらなかった。
- (7) a. *犯人を銃で撃ったが、弾は当たらなかった。
- b. 犯人に銃を撃ったが、弾は当たらなかった。

(6)と(7)で挙げた事例から観察できる通り、(5a)と一致するパターンでは、ある対象に何らかの影響が及んでいることを含意している。そのため、「刺さらなかった」「弾は当たらなかった」のような対象への影響を否定する表現を後続させると容認されなくなる。(6a)であれば、ナイフは行為者の手元から対象である男の体内へと確実に移動し、刺さることによって男に変化を与える(ナイフが刺されれば当然怪我を負い、男は刺さる前の状態とは同一であるとはいえなくなる)事態が最も自然に想起される。(7a)も同様である。一方(5b)と一致するパターンは、結果として引き起こされる変化を含意しないため、「刺さらなかった」「弾は当たらなかった」という否定表現が後続しても容認される。

また、副詞「すっかり」と共起させるテストを行ってみると、両表現においてそれぞれどのような事態の側面が強調されているか、その違いがより明らかになる。

- (8) a. 壁をペンキですっかり塗ってしまった。
- b. 壁にペンキをすっかり塗ってしまった。
- (9) a. 穴を庭にあった土ですっかり埋めた。
- b. 穴に庭にあった土をすっかり埋めた。
- (10) a. 舞台を白い花ですっかり飾った。
- b. ?舞台に白い花をすっかり飾った。

「すっかり」という副詞は、「残るところなくすべて。ことごとく」(『広辞苑』)という意味を持つ。(8)から(10)の事例を比べると、「すっかり」によって修飾される部分が異なることが分かる。(8a)(9a)(10a)の場合は、「壁」や「穴」、「舞台」が全て隙間無く「塗られ」、「埋

められ、「飾られ」たことを表すが、(8b)(9b)(10b)の場合は、残らず全て使われているのは「ペンキ」であり「土」であり「白い花」である。(10b)は若干容認性が低いが、「舞台に用意した白い花をすっかり飾った」のように白い花の数量的範囲を明確にするような修飾句を加えると、容認性が上がる。このことも、「すっかり」によって全て使い尽くされるのが「白い花」であることを裏付けている。

本節の最後に、連結に関わる他動詞が生起する表現の意味的な特徴について考察する。何故この表現に特に着目するかというと、この表現では認知的なレベルの意味だけでなく、既に状況レベルにおける意味までもが異なっていると解釈できるからである。従来の研究では、状況レベルの意味(真理条件的意味)が同一であるが故に壁塗り交替をする2つの表現はパラフレーズであると捉えられてきた。しかし、これまで確認した事例と同様の形式をとる表現において、以下に挙げるように顕著な意味上の差を示す事例がある。

- (11) a. 小指を赤い糸で結んだ。
b. 小指に赤い糸を結んだ。
- (12) a. 髪をリボンで留めた。
b. 髪にリボンを留めた。
- (13) a. 腕を縄で縛った。
b. 腕に縄を縛った。

(11a)では、二者間(あるいはもっと多数)の小指を赤い糸を用いて連結させる事態が直感的に思い浮かべられるが、(11b)では、静止した指に糸を結びつける事態が想定される。また、(12a)では、リボンによって留められた髪は垂れ下がらないように固定された状態にさせられるが、(12b)ではリボンが髪の毛に移動しただけであって、髪の毛がバラバラになっている状況でも解釈できる。(13a)であれば、対象となる人間の両腕を動かせないように縛る、という状況が想定されやすいが、(13b)では例えば右腕一本に縄を結びつけた状態としても解釈されうる。しかし、これらの(11a)(12a)(13a)の表現は、必ずその解釈にならなくてはならないのではなく、例えば、単数の対象である腕を縄で縛るという事態も想定可能ではある。対する(11b)(12b)(13b)は、単数の対象の解釈のみが許される。このように真理条件的意味が異なってくるとすれば、上記の現象は壁塗り交替ではないのだろうか。そのように例外的に処理するのは、いささか無理があるだろう。このような事例はただの周辺事例として片付けられるものではなく、検討の必要がある。

3. 先行研究の検討

従来から、壁塗り交替現象に関しては多くの研究がされてきた。ここでは、特に先行研究として語彙意味論的アプローチからの研究を取り上げ、概観する。そして、そこに見出せる問題点について検討し、本研究の提示する分析においてはその問題点がどのように克服できるかを示唆する。

3.1 語彙意味論的アプローチの概観

語彙意味論的な分析では、交替現象が起こるか起こらないかの決定を、動詞の語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure: LCS)によって説明している(cf. 影山 1996、由本 2000、岸本 2001)。動詞が複数の統語形式をとるということは、動詞中心の、つまり動詞が厳密に統語形式を予測するという言語観では重大な問題となる。この問題に対して、語彙意味論的な立場からはどのような説明を与えているのか。同一の動詞が生起しうる複数の統語形式は、一見、同じ動詞の 2 つの異なる用法のように思われるが、語彙意味論の立場ではこの動詞を同じ動詞とはみなさない。2 つの異なった統語形式は、異なった LCS を持つ別々の動詞から派生するとみなす。たとえば、壁塗り交替に関わる代表的な動詞であるとされる“load”は、以下のような 2 つの LCS を持ち、よって、2 つの統語形式において生起可能であると理解される。(14a)は(15a)の構文を派生し、(14b)は(15b)の構文を派生する。

- (14) a. load₁: [x CAUSE [BECOME [y BE [AT z]]]]
 b. load₂: [x CAUSE [BECOME [y BE [AT LOADED]]] BY MEANS OF
 [x CAUSE [BECOME [z BE [AT y]]]]
- (15) a. John loaded cartons onto the truck.
 b. John loaded the truck with cartons. (由本(2000:162-163))

ここでは語彙意味論の研究の詳細を述べることは目的ではないため、簡略に述べるに留まるが、語彙意味論的な分析が基づく言語観に妥当性があるとすれば、以下の点が満足されなければならない。それは、i) 統語形式が厳密に動詞から予測される点、ii) 表現に現れる意味が全て動詞に還元される点、iii) 動詞の分類に妥当性があり一貫している点である。結論を先取りして言えば、これらの点について語彙意味論的分析は十分に満足していないということを本研究は主張する。ここでは、特に i) の点を中心に先行研究の問題点を指摘する。

3.2 語彙意味論的アプローチの批判的検討

語彙意味論的アプローチでは、動詞と統語形式に対する以下のような考え方がその研究の根底にある。

- (16) 「英語でも日本語でも、状態変化や接触・打撃といった基本的な意味の領域ごとに動詞がグループを形成していて、その基本的な意味によって、それぞれの動詞の文型すなわち構文的な使われ方が決まってくる。このように考えると、従来は統語論の問題として扱われてきた「構文」が、実は動詞の意味論の問題に所属することが分かる」
 (影山編(2001:5))

このような動詞中心の枠組みでは、i)動詞はそれ自身が内部構造を持ち、ii)その内部構造が特定のn項の意味と関係を持つ、と想定される。このi、iiの想定から、iii)動詞が統語形式を決定する、という結論が導き出される。はたして、動詞が与えられただけで厳密に統語形式が1つに定まるのか。この問いに対して、以下の事例を挙げる。

- | | |
|-----------------|------------|
| (17) a. 扉が開く | (一が開く) |
| b. 太郎が扉を開く | (一が一を開く) |
| c. 扉が手前側に開く | (一が一に開く) |
| d. 太郎が扉を手前側に開く | (一が一を一に開く) |
| e. 大学が留学生に門戸を開く | (一が一に一を開く) |
| (18) a. 渦が巻く | (一が巻く) |
| b. 問題が渦を巻く | (一が一を巻く) |
| c. 太郎が腕に包帯を巻く | (一が一に一を巻く) |
| d. 太郎が腕を包帯で巻く | (一が一を一で巻く) |

iiiの結論が正しいとすれば、動詞が与えられた瞬間に統語形式が決定されなければならない。しかし、上記の例からも分かる通り、「開く」「巻く」は複数の統語環境に生起する。しかも、それぞれの用法は決して特殊なものではなく、実際の言語使用の場面でごく自然な表現として観察できる。これらの用法の中から、どれか1つを「動詞が予測する統語形式」とし、他の全ての自然な用法を例外的である、あるいは誤用であるとしてしまうのは、明らかに言語使用の実体に即していない分析であると言える。

また、このような「動詞の内部構造が名詞句を要求し、統語形式が決定される」という考え方には循環論の危険性がある。(17)に見られる動詞「開く」を、それぞれ「開く₁」「開く₂」…としよう。「開く₁」は主題となる名詞句を要求し、1項述語文を作る。「開く₂」は動作主と対象を要求し、2項述語文を作る。よって、これらは1項述語文、また2項述語文に生起するのだ、という説明を与えたとする。それと同時に、これらは、1項述語文と2項述語文という環境に生起しているという観察に基づいて、動詞「開く₁」が特定の項を1つ要求し、「開く₂」が特定の項を2つ要求する、という説明が与えられたとも言えるのである。動詞がn項を要求するからn項述語文に生起すると主張するのか、あるいは、n項述語文に生起するからその動詞はn項を要求するといえるのか、語彙意味論的アプローチはこのような循環論に陥る危険があると指摘できる。この問題について、本研究が理論的基盤とする構文文法的知見に基づけば、動詞と構文とを別個の相互に関係しあうものとして規定するため、このような循環性は回避できるという利点が挙げられる。

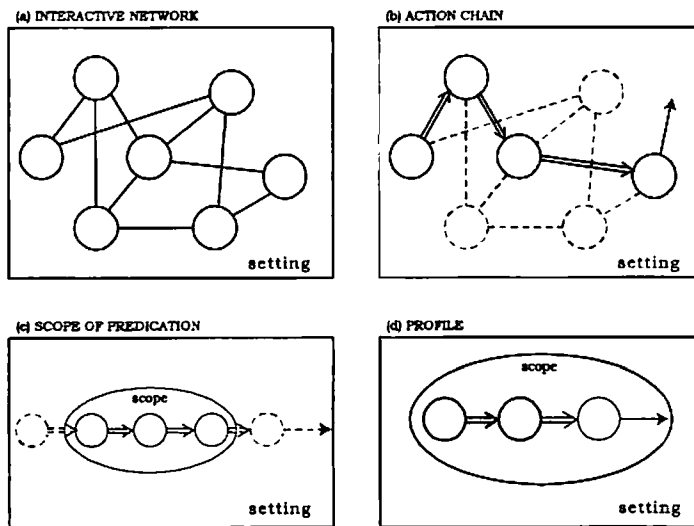
4. 本研究の理論的基盤

4.1 動力連鎖による事態の特徴づけー認知言語学的知見から

日常の言語表現には、外界の事態を認知して言語化する認知主体の「状況を取り込む態

度」が表れている。認知言語学では、真理条件的な意味だけでなく、そのような認知主体による事態の捉え方までも意味に含めて扱う。この立場からすると、ある言語表現が表すものは、認知主体によって能動的に取り込まれた「事態概念」であるといえる。こうした「事態概念」をエネルギー(動力)の連鎖によって特徴付けたモデルとして、図1に示すような Langacker(2002)のアクション・チェイン(action chain)モデルがある。図1において円で表されているのは参与者、矢印で表されているのはエネルギーの伝達である。

- (19) "We are most concerned with asymmetrical interactions, particularly those in which energy is transmitted from one participant to another. An interactive network often includes a series of energetic interactions, as sketched in Figure 2(b)(本稿においては図 1b): one participant transfers energy to a second, thus inducing a reaction whereby it in turn transfers energy to a third, and so on indefinitely (until a participant is reached whose reaction entails no further energy transmission). I will use the term "action chain" for such a configuration."
(Langacker(2002:215.5-10) 強調は論者による)



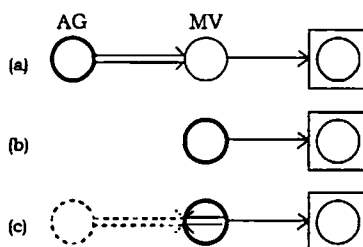
(Langacker(2002:215))

図1

非対称的な動力連鎖の中のどの部分にスコープを当てるか(図1c)、そして、どの参与者、どのエネルギーの伝達にプロファイルを当てるか(図1d)によって、実際に生まれる言語表現は異なる。どの部分をスコープに入れ、プロファイルを当てるかには、話者の主観性が反映されている。

アクション・チェーンと同種の動力連鎖による事態の表示モデルとして、Croft(1990)の使役連鎖(causal chain)モデルがある。このモデルの特徴は、事態を3つの局面、つまりCAUSE-BECOME-STATEに分けて捉え、表示するところにある。ラネカーのアクション・チェーン・モデルとクロフトの使役連鎖モデルは、事態の捉え方の根底において互いに反するものではなく、それぞれの特徴を活かし、より正確で明解なモデルへと発展されるものである。Taniguchi(1994)や山梨(2000)で提案されているモデルは、2つのモデルを融合した例である。

- (20) a. Andrea opened the door.
 b. The door opened all by itself.
 c. The door opened only with great difficulty. (Taniguchi(1994:179.1-3))
- (21) a. 次郎はドアを開けた。
 b. ドアはひとりでに開いた。
 c. そのドアは開けるのが難しい。



(Ibid.)

図 2

(20)(21)の(a)-(c)は、それぞれ図2の(a)-(c)に対応している。図2において円で表されているものは事態における参与者であり、その参与者の上に表示されている大文字の英語は、参与者の意味役割である。例えば図2の場合、AGは動作主(Agent)、MVは移動物(Mover)を表している。そして、二重線の矢印がエネルギーの伝達を、一重線の矢印が変化を表す。この変化には、位置変化も状態変化もともに含まれる。一重線の矢印の右側にある四角で囲まれた円は、その矢印の左側に接している参与者が変化した後を示している。

言語表現をこのような図法で捉えることにはいくつかの利点があるが、本稿では特に次の点に注目したい。このような表示によれば、言語表現を外界から切り離されたものではなく、事態と主体との関係の中で規定しようという点である。認知言語学は経験基盤主義に立脚しており、経験に裏打ちされない理論仮構物を想定しない。例えばこのような言語観からは、従来から定義が困難とされていた「主語」などの文法的カテゴリーに対し、動力連鎖のどの部分を担うかという観点からの再規定が可能となる。

本研究では、格パターンという構文の形式面を担うものが、意味面を担う事態認知と直

接的に結びついていると仮定して事例を分析し、構文交替現象の説明を行う。その分析にあたっては、図 2 で示したモデルに従うこととする。

4.2 構文の体系的記述－構文文法的知見から

ゴールドバーグらに代表される構文文法の言語観とは、従来の研究では一般原理の結果として生じる随伴的なものにすぎないとみなされてきた構文を、それ自身が個々の要素の意味からは予測できない意味を持つ「意味と形式の対応物」とであるとみなすことにに基づいている。この文法観に立った場合、動詞が持つ内部構造によって統語形式が決定されるという考え方はしない。

(22) "A central thesis of this work is that basic sentences of English are instances of *constructions* — form-meaning correspondences that exist independently of particular verbs. That is, it is argued that constructions themselves carry meaning, independently of the words in the sentence."

(Goldberg(1995:1.6-10))

動詞とは独立し、「構文」それ自体が「意味と形式の対応物」とであるという考え方は、Langacker(1987)で提案されているシンボリック・ビュー(symbolic view)、また、認知言語学の作業仮説である意味と形式の一対一対応(one-to-one correspondence between meaning and form)と一致する。Goldberg(1995)はこのような文法観に立ち、二重目的語構文や自動詞移動構文などの、伝統的な文法研究の文脈で中心的に扱われてきた文法現象を分析したという意味で重要な研究である⁵。この節では、ゴールドバーグの研究自体に深く踏み入ることは目的としないので彼女の展開する詳細な議論については言及しないが、特に、Goldberg(1995)で提案されている構文間ネットワークの概念を導入する。

構文文法的アプローチでは、構文を言語現象の記述の基本単位としてみなしている。この構文の目録は、個々に相関を持たずに存在しているのではなく、体系的な一般性を持って組織化されている。これには、構文の内側のネットワークと、この節で概観する、特定の構文を取り巻くネットワーク、つまり構文間ネットワークがある。

ある構文 A が別の構文 B を動機づけている場合、「構文 B は構文 A を継承している」と言うことができる。これらは非対称的な継承リンクによって関連付けられると規定される。この継承リンクは、①多義性のリンク、②メタファー的拡張のリンク、③部分関係のリンク、④具体例のリンク、の 4 つに大別されている⁶。このようなリンクによる関連付けは、構文の集合を体系的な存在として捉えることを許し、また、構文同士の関係の一般化を許す。

ここで注目したいのは、使役移動構文と使役状態変化構文は統語形式が等しくない点である。そのため、この 2 つの構文は継承リンクで結ばれるような動機づけの関係にあるとは規定され得ない。注目したいもう 1 つの点は、経済性の観点から、非同義性の原則に従

い、形式の異なる 2 つの構文は意味論的に異なるか、あるいは語用論的に異なっていなければならないという点である。先行研究でも指摘されるように、この 2 つの構文の間では、全体的解釈が可能であるか、部分的解釈しか許されないかという意味論的な違いが議論されている。このような 2 つの構文の関係について、本研究では、どちらか一方の構文が基底となっていて、それがもう一方に書き換えられたり、またその逆であったりする関係を想定しない。構文文法的観点から、本稿で扱う使役移動構文と使役状態変化構文という 2 つの構文は、それぞれ別々の動機づけを持つ構文の体系の一部であり、ある条件下において「統語形式が交替しているように見える」のだと考えられる。この点の詳細については、次の節において検討することにする。

5. 壁塗り交替現象への構文文法的アプローチ

この節では、はじめに使役移動構文とその構文的意味を検討し、次に、使役状態変化構文に対して同様に検討する。2 つの構文を別々に扱うのは、先の節でも触れたように、本研究ではこれらを異なった動機づけを持った構文とみなすからである。そのため、これらの構文をそれぞれ確認した後に、いわゆる壁塗り交替という現象のメカニズムについての検討を行うという段階を踏むことになる。

5.1 使役移動構文の構文的意味の検討

ここで検討する使役移動構文の一例を以下に挙げる。

- (23) a. 警官にナイフを向けた。
b. 警官にナイフを刺した。
- (24) a. 犯人にピストルを向けた。
b. 犯人にピストルを撃った。
- (25) a. 舞台袖に小道具を移動させた。
b. 舞台袖に小道具を隠した。

(23a)(24a)(25a)は、それぞれ(23b)(24b)(25b)の予備動作とも読み取れるだろう。例えば(23)の表現から自然に想起される事態に関して言えば、ナイフを何者かに刺そうとする場合、ナイフの切っ先が何者かに到達する前には、動作主はそのナイフを相手に対して向けていなくてはならない。そうでなければ、「刺す」という動作は成立しないだろう。同様に、(24)でも、銃を発砲する前にはその銃口を相手に向ける動作が不可欠である。これらの(23)から(25)の事例において、a の表現では動詞の意味に移動の方向性が感じられるが、b に現れる動詞自体に移動の方向性という意味を担わせることは直感に反すると言えるだろう。このことは、以下のような事例を検討することでより明らかになる。

- (26) a. 花子が卵を割った。

- b. 花子がボールに卵を割った。
(cf. *花子がボールを卵で割った。) (李(2001:10) cf.は論者による)
- (27) a. 花子がレモンをしぼった。
b. 花子がコップにレモンをしぼった。
(cf. *花子がコップをレモンでしぼった。) (ibid.)
- (28) a. テーブルの塵を払った。
b. ゴミ箱にテーブルの塵を払った。
(cf. *ゴミ箱をテーブルの塵で払った。)
- (29) a. ふりかけを振った。
b. ご飯にふりかけを振った。
(cf. *ご飯をふりかけで振った。)

これら(26)から(29)の事例は、いずれも a にあたる表現に現れる動詞が移動の意味と相関を持たないと言える。しかし、これらの事例における b の表現では、a の表現中に現れる動詞と同じ動詞でありながら、a とは異なる環境、つまり使役移動の環境に生起している。そして a とは違い、b の表現では、いずれの対象(「卵」「レモン」「塵」「ふりかけ」)もある地点(「ボール」「コップ」「ゴミ箱」「ご飯」)に移動している。この移動の意味を、「割る」「しぼる」「払う」「振る」という動詞そのものの意味に加えるのには無理があるだろう。そうなると、これらの表現から読み取れる移動の意味は、動詞単独によってエンコードされるものではないと言える。なお、参考事例として使役状態変化構文の事例を挙げたが、この事例は容認されない。

動詞単独によってエンコードされるのではないとして、では、格助詞「に」によってその移動の意味が与えられ、積み木式に個々の要素から全体の意味が構成されていくと考えることができるだろうか。しかし、そう考えるには問題がある。仮に、格助詞「に」が単独で移動の意味を指定すると想定した場合、多様な意味を持つ格助詞「に」の中で、どのようにその意味が特定されるのか、という問題が残るからである。格助詞「に」の意味については、森田(2002)で提示されているものだけでも、以下の7つが挙げられる。無論、文脈ごとに更に細かく規定することは可能である。

(30) 森田(2002)における格助詞「に」の代表的な用法

- | | | |
|-------------|-------|----------|
| 1. 10時半に寝る。 | …………… | 生起の時間的状況 |
| 2. 図書館にある。 | …………… | 存在の場所的状況 |
| 3. 図書館に行く。 | …………… | 移動の到達点 |
| 4. 先生に頼る。 | …………… | 行為の相手 |
| 5. 嫁に行く。 | …………… | 行為の名目・結果 |
| 6. 電車に乗る。 | …………… | 行為の対象 |
| 7. 意見に従う。 | …………… | 行為の対象 |

さらに、同様に格助詞「ヲ」の意味も複数想定され(同じく森田(2002)の規定では、格助詞「ヲ」の意味は大きく分けて16種類として規定されている)、その中でどの意味が選択されるかという問題と、「ニ」との組み合わせの問題がある。これらは表現を構成する要素1つ1つを単独に見ているだけでは規定されず、表現が全体として何を意味しているかを考えた時に初めて規定できるものであると考えた方が妥当である。この捉え方は、認知言語学で共有されている経験のゲシュタルトの考え方と矛盾しない。全体から捉えて初めて、全体を構成している個々の役割が規定され得るのである。

ここまでで、動詞が単独で意味を担うのではなく、「(Zが)XをYにVする」という形式そのものが、「Zの行うVという行為によって、XがYに結果的に移動する」という意味を持つと考える方向の妥当性が明らかになった。更に、「(Zが)XをYでVする」と交替可能に見える例、いわゆる壁塗り交替現象を具体的に挙げ、検討する。

- (31) a. 犯人 {に / へ} 銃を向けた。
 b. 犯人 {に / *へ} 銃を撃った。
 (cf. *犯人を銃で向けた。 / 犯人を銃で撃った。)
- (32) a. 警官 {に / へ} ナイフを向けた。
 b. 警官 {に / *へ} ナイフを刺した。
 (cf. *警官をナイフで向けた。 / 警官をナイフで刺した。)
- (33) a. 先生の机 {に / へ} 花を置いた。
 b. 先生の机 {に / *へ} 花を飾った。
 (cf. *先生の机を花で置いた。 / 先生の机を花で飾った。)

(31)から(33)において、それぞれのaとbでは以下のような違いが見られる。それは、i) 選択可能な格助詞が異なり、ii) 「交替」の可不可が異なる、という2点である。ここで挙げた2つの違いは、それぞれ独立した特徴なのか、あるいは相関しあっているのか。名詞句Yが格助詞「へ」でマークされ得る場合は使役状態変化構文とのパラフレーズが容認されず、「ニ」のみでマークされる場合には容認されることは、何か関係があるのではないか。国語学でも従来から指摘されていることではあるが、方向をマークする格助詞「へ」と「ニ」は全くの同義ではなく、両者には違いが見られる。格助詞「へ」は方向を表示するのみであり、着点までは含意しない⁷。一方、格助詞「ニ」は着点までを含意する。(31)から(33)の例では、それぞれbは格助詞「へ」とは共起できない。つまり、bの場合の表現は、必ず着点の要素を表現中に必要としているということである。以上から、使役状態変化構文と言い換え可能に見える使役移動構文の事態認知は、以下の図3のように規定することができる。

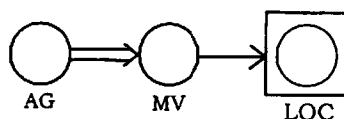


図3

この事態認知の図式で表わされているのは、AG(動作主)が動詞によって表現される働きかけをすることによって、MV(移動物)のある着点への位置変化(LOC)を引き起こす事態である。例えば、(32b)で当てはめて考えてみよう。この事例では言語化されていない動作主が、「刺す」という行為を遂行するのに伴い、「ナイフ」という移動物は「警官」の肉体を着点とした位置変化を起こす。このような事態を図3の認知図式は規定している。

5.2 使役状態変化構文の構文的意味の検討

本節では、使役状態変化構文の中でも、特に、使役移動構文と言い換え可能であるとみなされている現象の構文的意味を検討する。

- (34) a. Pat sprayed paint onto the statue.
 b. Pat sprayed the statue with paint. (Goldberg(1995:175.23))

Goldberg(1995)では、(34b)のような表現を「使役+with 付加詞構文」として扱っている。日本語の場合であれば、「使役+デ格構文」、あるいは意味役割自体を指して、「使役+具格構文」といえるかもしれない。岸本(2001)では、壁塗り交替が可能な表現に生起する名詞句Yが具格である必要性は明確には述べられていない。しかし、以下の(35)から(38)の事例からも分かる通り、明らかにこの構文における名詞句Y+格助詞「デ」は道具としての解釈を引き起こす。

- (35) a. 壁をペンキで塗った。
 b. 壁にペンキを塗った。
 (36) a. プラモデルを油性絵の具で塗った。
 b. プラモデルに油性絵の具を塗った。
 (37) a. 髪をリボンで留めた。
 b. 髪にリボンを留めた。
 (38) a. スカーフをブローチで留めた。
 b. スカーフにブローチを留めた。

(35)から(38)におけるそれぞれaの表現を見ていくと、壁を「塗った」状態にするために用いるのがペンキであり、プラモデルを「塗った」状態にするのが油性塗料であり、また、髪を固定するためにリボンを用い、スカーフを固定するためにブローチを用いている。交

替可能とされる表現に現れる格助詞「デ」は道具あるいは手段をマークするといえるだろう。では、「ニ」の時の議論と同様に、広い用法を持つ格助詞「デ」が、その多くの用法の中からどうして特に道具・手段の用法をマークすると予測できるのだろうか。前節で提起した問題と同様の問題がここでも指摘できる。

(37)と(38)の表現は連結に関わるものであり、(35)(36)の表現に比べ、aとbが意味的に顕著な差を示している。この点は、先に確認した通りである。連結に関係する動詞と共起する表現が、厳密には真理条件的意味においてもパラフレーズとして成立していないことは、2.3節で述べた。2.3節で挙げた(11)(12)(13)の事例と、以下のような事例を比べてみることで、使役移動構文と使役状態変化構文の2つの表現の真理条件的意味が違うことはより明らかになるだろう。(39)から(41)は、語彙的に複数の存在を含意している名詞句が名詞句Xとして生起している事例である。

- (39) a. 小指と小指を赤い糸で結んだ。
 b. ??小指と小指に赤い糸を結んだ。
 (40) a. 両岸を船で渡した。
 b. ??両岸に船を渡した。
 (41) a. 前後の車両をロープでつないだ。
 b. ??前後の車両にロープをつないだ。

これらの例から、名詞句Xが「小指と小指」「両岸」「前後の車両」になると「(Zが)XにYをVする」のパターンの容認性が下がることが分かる。「(Zが)XをYでVする」と「(Zが)XにYをVする」では、全く同じ名詞句を取っていても、その名詞句が複数の対象を含意しているかそうでないかの読み込み方が異なる、ということを2.3で示した。この(39)から(41)の例では、名詞句Xを語彙的に複数の存在を表すものに置き換えたために、bのパターンの容認性が下がるのである。このことから、格パターンによって状況の読み込みの方向が定められるといえる。

再び、(35)(36)の事例の検討に戻る。使役状態変化構文に現れる格助詞「デ」が、道具・手段をマークするものであることは先に触れた。しかし、道具・手段であればどのようなものでも容認可能になるのではない点に注意が必要である。使役移動構文と言い換え可能であると判断できる場合には、ある条件を伴っている。

- (42) a. 壁をペンキで塗った。
 b. 壁にペンキを塗った。
 (43) a. 壁を刷毛で塗った。
 b. *壁に刷毛を塗った。

(42)(43)は、従来の研究において典型的に壁塗り交替をすると規定されている動詞「塗る」

を用いた表現である。この容認性の差から、名詞句 Y の性質についての制約として、名詞句 Y が道具として解釈可能で、且つ、それが移動物としての解釈の可能性も持っているものでなければならない、という制約が課されているといえる。典型的な道具として解釈可能な「刷毛」は、壁と接しはするが壁に付着することはない。よって、移動物としては解釈不可能である。そのため、(43b)は容認されない。一方のパターンでは道具として、もう一方のパターンでは移動物として名詞句が読み込まれるということは、格パターンの選択に道具の性質と移動物の性質の前景化／背景化が関わっていると考えられる。

以上で見た点は、話者が外界にある状況をどのように捉えるかという視点と構文の選択とが関わっていることを示している。(37)(38)において、それぞれの a, b は、その事態においてどちらの名詞句が移動していると認識できるかという点で違いを見せる。(37a)では移動物は髪であり、(37b)では逆に移動物はリボンである。a の格パターンに生じた時、名詞句 X を「(位置変化なり状態変化なりの差はあれ)変化をこうむるもの」と読み込むように解釈の圧力がかかると考えると、以下のような容認性の差も説明ができる。

- (44) a. 男をナイフで刺した。
b. 男にナイフを刺した。
(45) a. ??リングをナイフで刺した。
b. リングにナイフを刺した。

「リング」は生物ではなく、普通、静止した状態である。そのため、ナイフで刺されたところで、動きが止まるというような変化はこうむらない。そこで、構文側が課す意味との間で不整合を起こし、表現の容認性が下がるのである。

ここまでの議論から、使役状態変化構文の「構文」的意味をまとめると、以下のような事態認知の図式として規定できる。

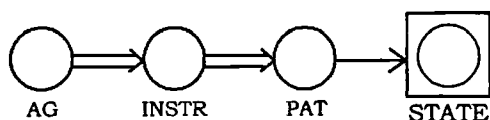


図 4

この認知図式では、AG(動作主)が何らかの INSTR(道具)を用い、動詞で表わされるような働きかけを行うことで、PAT(被動作主)の状態変化(STATE)を引き起こす事態を表わしている。(35a)の事例を当てはめて考えてみよう。ここでは言語化されていない動作主が、「ペンキ」という道具を介して「塗る」という行為を行うことで、「壁」は塗装されるという状態変化を引き起こす。このような事態を、図 4 の認知図式は規定している。

5.3 事態認知の図地反転

構文と事態認知の関係を研究したものと、谷口(2004)が挙げられる。谷口は、壁塗り交替(谷口(2004)は「所格交替」と表記している)を次のように分析している。壁塗り交替を起こすのは、「移動」と「状態変化」という2つの事態を内在させる複合的事態に限られ、交替の可否は「移動」という事態に焦点を当てるか「状態の変化」という事態に焦点を当てるかの選択に由来している」(Ibid.:79.8-9)としているのである。本稿もこの立場に基本的に従うものである。

構文交替という現象に対し、黒田(2004)は現象の観察・記述の面で重要な指摘をしている。それは、i)交替は「する」「しない」の二者択一ではなく程度の差があり、ii)交替には方向性が見られる、という指摘である。つまり、「(Zが)XをYでVする」をP1、「(Zが)XにYをVする」をP2としたならば、交替には、P1→P2という方向性(P1が基本でP2が派生的である)と、その逆のP2→P1という方向性(P2が基本でP1が派生的である)があるという指摘である。先行研究で主に扱われているのは、このうちの前者の方向であるP1→P2がもっぱらであり、後者のP2→P1に関してはあまり扱われていない。また、後者のケースの方が該当例が少ないことも黒田は指摘している。なお、黒田の主張が、基底構造が存在し、その派生として別の統語形式が出力されるということを意味してはいないという点には注意が必要である。

- (46) a. 山を { i.トンネル, ii.?線路, iii.*交通 } で通す
 b. 山に { i.トンネル, ii.線路, iii.?交通 } を通す (黒田(2004:4))

(46)は使役状態変化構文から使役移動構文が派生している例である。黒田は、この場合の「派生」とは「派生があるように見える」だけで、実は「構文間の競合の副産物」としている。

本研究では、谷口の指摘するようなプロファイルの当たり方の違いや黒田の指摘する交替の方向性を取り込んだ分析をするために、アクティブ・ゾーン(活性化領域)⁸の概念を図法に導入して事態の規定を試みる。アクティブ・ゾーンという関係性で参加者のそれぞれを結ぶことは、結ばれた参加者同士の性質の関係性を示すことになる。つまり、それぞれの参加者は、ある特定の構文に生起している状態では、その参加者が持つ意味全体の中のある特定の部分にハイライトが当てられているという関係性である。また、2つの事態を、関係性はあるけれども異なった事態として表示することで、「2つの表現は交替しているとみなされるにも関わらず、それぞれの表現には違う解釈が与えられ得る」ことを取り込んだモデルとして提示できる。

図5は、基本としてのパターンが「(Zが)XをYでVする」である場合の「(Zが)XにYをVする」のパターンを図示している⁹。この中で、二重矢印や一重矢印などはこれまでの図法と同じである。図5で初めて用いる破線については、結ばれた参加者が同一の名詞句であり、且つ、その意味間に関係があることを示している。例えば「机に花を飾った」

という表現で考えてみよう。ここで名詞句Yにあたるのは「花」である。「花」という性質全体の中でも、この「(Zが)XにYをVする」というパターンで現れた時には特にその中の移動物としての性質が活性化されるのである。つまり、「花」という名詞句そのものの自体と実際に事態に関与している部分とが、アクティヴ・ゾーンの関係を作っているのである。

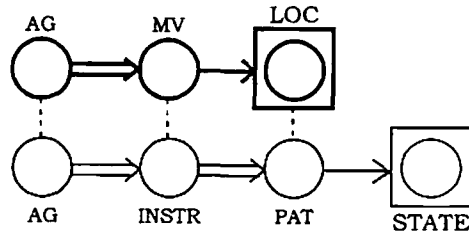


図5

次の図6は、方向性が逆のケース、「(Zが)XにYをVする」が基本である場合の「(Zが)XをYでVする」の表現を図示している。

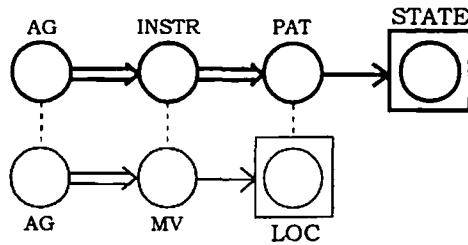


図6

これらの図から読み取れることは、以下の点である。i) プロファイルされたそれぞれの参加者の性質が名詞句全体の意味とアクティヴ・ゾーン関係になくしてはならない。ii) 図5では、潜在的に選択可能な事態認知に比べて、プロファイルの当たっている事態認知においては行為連鎖が短くなっている。iii) 図6では、潜在的に選択可能な事態認知に比べて、プロファイルの当たっている事態認知における行為連鎖が長くなっている。iの点に関しては、(42)(43)で検討した内容と一致している。つまり、仮に道具として解釈できるものであっても、一方でまたそれが移動物として解釈可能でなければ交替現象にはならないという点をこの図で示しているのである。iiは、より事態認知が抽象化されているということである。図5において、例えば「犯人に銃を撃つ」「男にナイフを刺す」のような場合は、被動者の状態変化までは含まれない事態認知である。「犯人に銃を撃ったが、弾は当たらなかった」「*犯人を銃で撃ったが、弾は当たらなかった」のような容認性の差もこの図から読み取れる。それとは逆の場合のiiiについてだが、これは単純に考えれば基本よりも事態認知が豊かにされているということだが、ただの逆の流れであると処理してしまうには図5の

例に比べてあまりにも当てはまる事例が少ない。このような事実の背後には、一体どのような原因があると考えられるだろうか。

状態変化は位置変化の一種であると読み取ることが可能である。このように読み取るために必要なメタファーは、状態の変化をある場所への移動として理解する、空間を起点領域とした一般的なメタファーである。このようなメタファーによって、状態変化は位置変化のある特殊な下位タイプと捉えることができる。例えば、位置変化という変化の集合を、A としてみる。対する状態変化の集合を B とする。「状態変化はある新しい場所への位置変化である」とすれば、集合 B の外延は常に集合 A の外延の内側に含まれるということになる。そう考えると、状態変化を位置変化に読み替えるのは比較的容易いが、逆に、位置変化を状態変化に読み替えるのは難しいといえる。何故なら、より大きな集合 A の中には、集合 B に適合しないものも含まれているため、一律に位置変化が状態変化に読み替えられるとは限らないからである。図 6 のケースが稀であるのはこのような理由によるのではないかと推測できる。

5.4 本研究が与える交替現象への示唆

Goldberg(1995)で提案されている継承リンクの規定に従い、使役移動構文と使役状態変化構文の間にどのような関係が結ばれるかを検討する。紙幅の都合上、結論を先取りすることになるが、本研究で着目してきた壁塗り交替現象に関わる表現のそれぞれの関係は、以下の 3 点に要約できる。

- (47) a. 【結果を伴う使役移動構文】は【使役移動構文】に動機づけられている。その関係は、後者から前者へのメタファー的拡張のリンクによって表示される
- b. 【自動詞構文】は【他動詞構文】の真部分であるという点で動機づけられている。この関係は、後者から前者への部分関係のリンクによって表示される
- c. 【使役状態変化構文】と【結果を伴う使役移動構文】は、意味論的同義(S-synonymous)の関係で結ばれる

この点から、本研究は、壁塗り交替を取り巻く体系として図 7 のネットワークを提示する。このネットワークは、本稿で着目してきた 2 つの言語現象が、それぞれ異なった動機づけを持つ構文のネットワークの一部として存在することを示している。従来から、交替現象は動詞をピボットとして表層形に現れる構文が交替する現象とみなされてきた。本研究は、このような現象を、それぞれ別個の意味的動機づけを持った構文がある条件の下で意味論的同義を示す時に、「あたかも交替しているように見える」現象であり、構文の選択の問題であるという観点から捉えなおす。構文それ自体が体系をなしているという立場からすれば、交替現象に関わる 2 つの表現の間で解釈の差が見られることも自然なこととして理

解される。何故ならば、両表現はそれぞれ別々の動機づけによって選択される表現であり、上位の構文から、異なった意味を継承していると考えられるからである。また、実際の使用の場面でどちらの構文を選択するか、その取捨選択には認知主体の事態の捉え方が反映されているということは、前節までで具体事例と共に確認した。

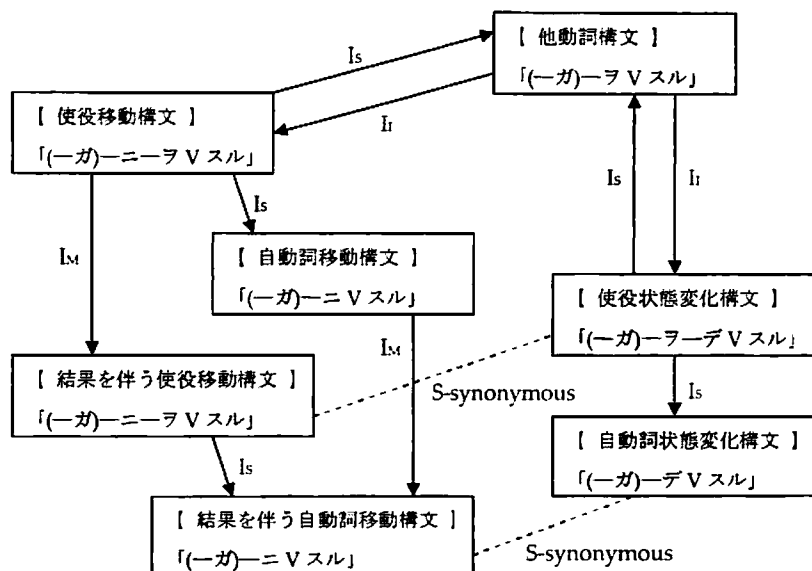


図 7

最後に、連結に関わる動詞と共起する表現がどのように位置づけられるかを検討することにする。構文のスキーマ度は均一ではない。スキーマ的により上位の構文もあれば、その具体例としてより詳細な構文もある。本稿で着目してきた連結に関わる表現は、使役移動構文と使役状態変化構文というよりスキーマ的な構文からの具体事例である。よって、その関係は以下の図 8 として示すことができる。それぞれの上位の構文に連結に関わる動詞が融合を果たした構文が、より具体的な構文として記述されている。

ここで注意したいのは、図 8 で示したような意味的により特化された構文は、もはや上位の構文と厳密な平行を成さず、具体的な構文同士は意味論的同義の関係で結ぶことができない点である。ネットワークのそれぞれのノードを繋ぐ(あるいは繋がらない)このような関係性は、(39)から(41)の具体的な事例を検討した結果に支えられている。本研究では、このように、構文がネットワークをなすとみなして体系的に捉えることで、実際の言語現象に対してより経験的に妥当な分析が可能になることを示唆した。

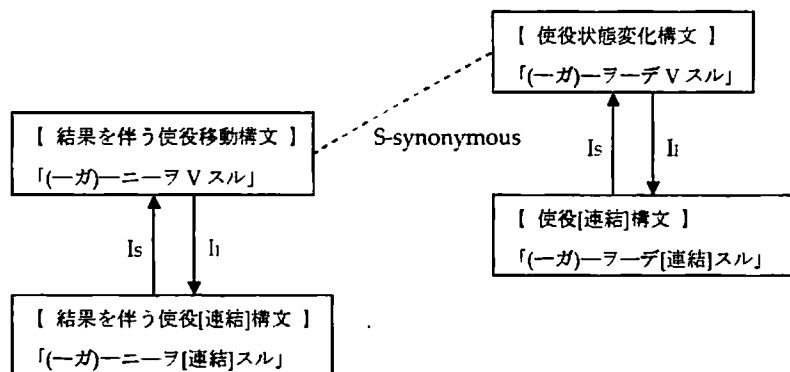


図 8

6. 本研究のまとめと今後の課題

従来から研究されている壁塗り交替現象に対し、本研究では、認知言語学の言語観に立ち、構文文法的な手法を取り入れて分析することを試みた。本研究の目的は 2 つの側面を持っており、1 つは、構文文法の知見を日本語研究に導入することであった。この点に関し、Goldberg(1995)などに代表される英語を対象とした研究における手法を、日本語の言語現象を分析するのに適したものとする為のいくつかの変更を提案した。本研究の提案は、i) 格助詞の組み合わせからなる格パターンを構文の形式面とみなし、ii) 認知言語学的知見から、i) の形式と結びつく意味面を事態認知が担うとみなすことである。そして、このような分析的立場に立ち、本研究の目的の 2 つ目の側面である、構文文法が英語に留まらず広い言語現象に対して妥当であるという証明を試みた。

交替現象、とりわけ本研究で取り上げたのは壁塗り交替であるが、この交替現象は、従来の動詞中心のアプローチにおいては、動詞の内部に概念構造を想定し、ある種の動詞をピボットとして複数の統語形式が派生されるというシステムであるとして説明されていた。しかし、本研究が立脚している言語観・分析的立場から実際の言語現象を考察した結果、交替現象に対する以下のような示唆が得られた。それは、交替現象とは動詞を軸として 2 つの統語構造が「交替」しているのではなく、別々の動機づけを持った 2 つの異なった構文が選択可能である時に「交替しているように捉えられる」現象であるという示唆である。このような示唆の背景には、構文が単に規則から派生された表層の構造に過ぎないという言語観ではなく、構文それ自体が意味を持って体系的なネットワークの中で有機的な関わりをなしているとみなす言語観が必要である。つまり、壁塗り交替を分析するにあたっては、2 つの構文が関わっている構文ネットワークを考慮しなければならない。そのネットワークは、本稿では図 7 によって示した。

このような分析によって、交替が可能である事例と不可能な事例へ妥当な説明が与えられる。実際の言語文脈では、認知主体が事態をどのように捉えて言語化するかという選択

によって、どちらの動機づけに基づいた構文を選択するかは左右されるといえる。重要な点は、選択されうる2つの事態の規定とその選択に関わる要素の2点である。選択されうる事態とは、本研究では図5、図6に表したような、参与者の解釈可能性を取り込んだ事態認知の図式によって示される。そして、この選択に関わるのが、認知主体が事態のどの点に焦点を当てるかという要素である。従来のアプローチにおける循環論については、3.2節において指摘した。本研究のアプローチでは、動詞をリストアップし、どの動詞がどの統語環境に生起するかをその都度記述していくようなアドホックな説明を避けることができる。つまり、それぞれの動機づけをもった構文の体系の中で、どの位置づけの構文と動詞が融合するかという問題意識においては、動詞自体に生起する統語の情報を負わせる必要がなく、先に指摘した循環論は回避できるのである。また、表層の統語形式が交替するのではなく認知主体による構文の選択のひとつの結果であると仮定すれば、記述すべきは、どのような構文が選択可能であり、どのような構文が選択不可能であるかという点だけといえる。この点に焦点を当てることで、「交替可能な動詞」「交替不可能な動詞」というリストで括るのではなく、実際の生きた言語文脈においては認知主体の解釈によって多様な構文で事態が表わされるということが記述できる。

無論、構文の選択には名詞句の性質などの関与も考えられる。名詞句の性質の記述は、主観に負うところが多く明確な基準がないことや記述に際限がなくなることなどから非常に困難であると予想される。しかし、今後、更に有益な構文の記述を追及するならば、名詞句の問題は避けて通れないだろう。名詞句の意味や語用論の効果などを取り込み、更なる分析手法の検討が今後の課題と言えるだろう。

<注>

- 1 構文(construction)の定義は研究者によってゆれており、統一的な定義というのは未だ存在していないのが現状であるが、おおむね、構文とは意味と形式のペアから成り立つという定義では一致している。本研究では、特に、ラネカーによる「複合的表現であればどんなものでも構文とみなすことが可能である」という構文の定義を採用する。

"In Cognitive Grammar, complex expressions are described as assemblies of symbolic structures. ... An assembly of this kind, involving composition at one level of organization, is a minimal construction. Larger assemblies arise when the composite structure of one minimal construction functions in turn as a component structure in another, representing a higher level of organization." (Langacker(2000: 21.5-15))

- 2 この点は、日本語の語順が完全に自由であり、語順のかきまぜが可能であるということを指摘しているのではない。他の語順と比べ、相対的により自然な語順は存在すると考えられる。このような自然な語順は、言語表現だけを取り出して決められるものではなく、文脈や情報構造、発話する主体が事態に対してどんな態度を取っているかなどの複数の要因に関わりあって決定されるものであると本稿では想定している。そういった意味においては日本語の語順は自由ではないが、統語的なレベルで語順がかなり制限されている英語とは制約の種類が幾分違うといえるだろう。

- 3 壁塗り交替現象として規定されている言語現象には、無論、自動詞文もあり他動詞文もある。本稿は構文的知見を導入し、そのネットワークの観点からこれらの現象を捉えなおそうと試みるため、異なる形式をとる自動詞文と他動詞文を一時に扱うのは議論の煩雑さを招くことになりかねない。そのため、本稿では、特に他動詞構文の具体事例であるところの、使役移動構文、使役状態変化構文を取り上げる。

自動詞文の詳細な議論は割愛することになるが、他動詞のネットワークと自動詞との関係については、本稿の5節で触れることになる。

- 4 本稿では、壁塗り交替現象における「(Zが)XをYでVする」の側の構文に対して一貫して「使役状態変化構文」という名称と呼ぶが、無論、この名称で指し示すことが可能な構文の範囲はもっと広いといえる。例えば、「(Zが)XをVする」(ex. 「警官が脱獄犯を射殺した」)であっても、「使役状態変化構文」と呼ぶことができる。しかし、本稿で着目する現象は壁塗り交替に関わる現象であるため、本稿において「使役状態変化構文」と呼ぶものは、全て「(Zが)XをYでVする」の格パターンを取るものとする。
- 5 構文文法的な研究が生まれた背景には、中心的な現象の説明のみをして周辺の言語現象を切り捨てる生成言語学的な態度に真向から対立する流れである、周辺の現象から中心的な現象へと向かっていくという研究姿勢が関係していることに注意しなければならない。このような研究姿勢のため、初期の構文文法の研究文脈においては、生成言語学では例外的事例としてリストに記載しておけばいいとされてきたイディオム表現を研究対象として取り上げる傾向にあった。例えば、初期の代表的な構文文法的研究である Fillmore, Kay & O'Connor(1988)は“let alone”というイディオムを扱った研究である。
- 6 Goldberg(1995)では以下の4つの継承リンクが提案されている。
 - ① 多義性のリンク(Ir):
ある構文のもつ特定の意味と、その意味からの拡張としてある意味との間の関係を捉えるリンク
 - ② 部分関係のリンク(Is):
ある構文が、それとは独立して存在する別の構文の真部分である関係を捉えるリンク
 - ③ 具体例のリンク(Ii):
ある構文が、他の構文の特殊例である関係を捉えるリンク
(具体例のリンクは、常にその逆として部分関係のリンクを含意する)
 - ④ メタファー的拡張のリンク(Im):
2つの構文がメタファー的写像によって関連付けられるという、その意味的関係を捉えるリンク
- 7 『日本文法大辞典』によれば、

「に」^① 下にくる用言に対して限定修飾に立つことを示す用法。すなわち動作・作用・存在等の目標を示す。細かく見れば時間的・空間的・心理的な場合に依り、種々の用法に分かれる。

④時を指定する。⑤場所を指定する。…」

「へ」語源は「あたり」を意味する名詞「へ」、たとえば「沖つ藻は辺(陸)には寄れどもさ寝床も与はぬかもよ浜つ千島よ」[日本書紀・歌謡]

①移動性動作の目標を示し、言語主体の現在地点から遠く離れた地点へ向かって行く、という意を担う用法。…」

「に」と「へ」は古くからこのように目標を示す助詞とみなされてきた。そして、「へ」助詞とほとんど同じように用いられる「に」助詞との差異について、古くは「方向」と「場所」であるとされていた。…現代語では帰着点を表す「に」と区別して用いられることが少なく、…」とあることから分かるように、その助詞の使い分けの根底には「方向」を表すのか「場所(帰着点)」を表すのかという違いがあった。この「に」と「へ」の使い分けについては、現代の言語直感においても、また伝統的にも認められるものである。
- 8 アクティブ・ゾーン(活性化領域)とは、表現に表れている関係に直接関与する部分のことを指す。実際の表現では、活性化領域とプロフィールされているもの(プロフィールされているものは言語化されていると考えられている)との間にずれが生じることがある。例えば、「自転車を漕いだ」という表現は、表現上では「自転車」を漕いでいるのであっても、実際には「ペダル」を漕いでいると考えられる。このように、自然な表現ではしばしば、プロフィールされているのは「自転車」であっても活性化領域は「ペダル」である例から分かるように両者にずれが生じるのである。
- 9 本稿では、基本のパターンとして「(Zが)XをYでVする」(あるいは「(Zが)XにYをVする」)を持ち、更に表現としても「(Zが)XをYでVする」(あるいは「(Zが)XにYをVする」)のパターンを取っている事例があることも確認している。例えば、(43)のような表現が挙げられる。本稿では特には取り上

げなかったが、このような事例の取捨に関し、何をもってして基本のパターンと認定するか、という問題があると指摘できる。この問題に関しては、認知言語学の基本的知見となっている用法基盤モデル(Usage-Based Model)に基づき、実際の言語文脈に現れる事例を検討していくことが回答を与えるのではないかと考えられるが、その具体的な方法や分析については今後の課題としたい。

<参考文献>

- Croft, William. 1990. "Possible Verbs and the Structure of Events," *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, ed. by Savas I. Tsohatzidis, Routledge, London, pp.48-73.
- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*, University of Chicago Press, Chicago.
- Fillmore, Charles J. 1968. "The case for case", in E.Bach and R.T.Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston, pp.1-49.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay & Mary Catherine O'Connor. 1949. "Regularity and idiomatity in grammatical constructions: the case of *let alone*", *Language*, 64, pp.501-538.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.(河上誓作他(訳),『構文文法論 英語構文への認知的アプローチ』, 研究社, 2001.)
- Goldberg, Adele E. 1998. "Patterns of Experience in Patterns of Language", in Michael Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, pp.203-220.
- 早瀬尚子 2002. 「構文解析の中核としての動詞」,『言語』Vol.31-No.12, 大修館書店, pp.58-65.
- 影山太郎 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点』, くろしお出版.
- 影山太郎(編) 2001. 『日英対照 動詞の意味と構文』, 大修館書店.
- 岸本秀樹 2001. 「第4章 壁塗り構文」, 影山太郎(編),『日英対照 動詞の意味と構文』, 大修館書店, pp.100-126.
- 黒田航 2004. 「いわゆる「壁塗り交替」について: 構文は交替しない, 選択される」, Kyoto Linguistics Colloquium 7/24 発表資料,
[<http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/no-alternation-but-selection.pdf>].
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1, Theoretical Prerequisites*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2000. "A Dynamic Usage-Based Model." In Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based Models of Language*. Stanford: CSLI. 1-63.
- Langacker, Ronald W. 2002. *Concept, Image, and Symbol. The Cognitive Basis of Grammar 2nd edition*, Cognitive Linguistics Research 1, Berlin-New York: Mouton de Gruyter.
- 李在鎭 2001. 「他動詞文のゆらぎ現象に関する「構文」的アプローチ」,『言語科学論集(第7号)』, 京都大学, pp.1-20.
- 李在鎭 2003. 「認知事象の複合的制約に基づく結果構文再考—構文現象の体系的記述を目指して—」, 山梨正明他(編),『認知言語学論考 No.3(2003)』, ひつじ書房, pp.183-262.

- 松本曜 1997. 「空間移動の表現とその拡張」、中右実(編)、『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』、研究社、pp.126-230.
- 松本曜 2002. 「使役移動構文における意味的制約」、西村義樹(編)、『認知言語学Ⅰ：事象構造』、東京大学出版会、pp.187-211.
- 松村明(編) 1971. 『日本文法大辞典』、明治書院.
- 森田良行 1998. 「日本語使役文の研究」、『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』Vol.11、早稲田大学日本語研究教育センター、pp.191-204.
- 森田良行 2002. 『日本語文法の発想』、ひつじ書房.
- 中島平三(編) 2001. 『[最新]英語構文事典』、大修館書店.
- 根本典子 2003. 「所格交替に関する構文理論的考察」、『英語青年』Vol.149-No.3、研究社、pp.182-184.
- 西村義樹 1998. 「行為者と使役構文」、中右実(編)、『日英語比較選書 5 構文と事象構造』、研究社.
- Taniguchi, Kazumi. 1994. "A Cognitive approach to the English Middle Construction." *English Linguistics*, Vol.11. English Linguistic Society Japan, pp.173-196.
- 谷口一美 2004. 「行為連鎖と構文Ⅰ」、中村芳久(編)、『シリーズ認知言語学入門 認知文法論Ⅱ』、大修館書店、pp.53-87.
- Taylor, John, R. 2002. *Cognitive Grammar*. New York: Oxford University Press.
- 寺村秀夫 1982. 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、くろしお出版.
- 山梨正明 1993. 「格の複合スキーマモデル」、仁田義雄(編)、『日本語の格をめぐって』、くろしお出版、pp.39-67.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』、ひつじ書房.
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』、くろしお出版.
- 由本陽子 2000. 「語と概念構造」、『日本語学』19-5、明治書院、pp.158-168.